

| | |
|------------------|---|
| Title | パウル・ フレーリヒ著, 伊藤成彦訳 ローザ・ ルクセンブルク : その思想と生涯 |
| Sub Title | Paul Frölich, Rosa Luxemburg : Gedanke und Tat, translated by Shigehiko Ito |
| Author | 飯田, 鼎 |
| Publisher | 慶應義塾経済学会 |
| Publication year | 1969 |
| Jtitle | 三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.62, No.2 (1969. 2) ,p.204(96)- 207(99) |
| JaLC DOI | 10.14991/001.19690201-0096 |
| Abstract | |
| Notes | 書評 |
| Genre | Journal Article |
| URL | https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19690201-0096 |

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書 評

パウル・フリーリヒ著、伊藤成彦訳

「ローザ・ルクセンブルク

—その思想と生涯—

Paul Frölich, Rosa Luxemburg—

Gedanke und Tat, Hamburg, 1945

ローザルクセンブルク！彼女は、カール・リーブクネヒト (Karl Liebknecht) とともに、ドイツ革命の悲劇性をもっともよく象徴するものとして、今もなおその名を口にする人々にある種の悲愴な感慨をよびおこさずにはないだろう。まことにレーニンとの関係において、さまざまな批判と評価をうけながら、今日もなお現代史や社会主義運動史に関心をもつ人々のどこかに、ローザが立っているのは、たんにその革命家としての悲劇性や、あるいはレーニン＝ボルシェヴィズムとの対立というような現象的な側面よりも、革命家としてのローザのなかに、何よりもまずすぐれた人間性を見出すからではないだろうか。

伊藤成彦氏によってこの度邦訳されたフリーリヒの「ローザ伝」を読んで、筆者はますますその感を深くするのである。巻末の「訳者あとがき——パウル・フリーリヒの横顔」によれば、著者フリーリヒは、1884年8月ライプツィヒに労働者の家庭の子として生まれ、第一次大戦の勃発までは一貫してドイツ社会民主党左派に属し、大戦中はボルシェヴィキの影響を受けたブレイメン左派に参加したローザ＝スパルタクス・バンドと対立し、また戦後、レーニンの死までの5年間はドイツ共産党中央委員のひとりとして、レーニンおよびソヴェート政府のドイツにおける実行者として働いたのであったが、ソヴェート共産党とドイツ共産党とを中心とするヨーロッパ社会主義運動の発展の過程において、コミンテルン指導部と対立し、ドイツ共産党から排除されたパウル・レヴィが、ドイツ共産党の問題をめぐって自説を強化するため、ローザの獄中の遺稿『ロシア革命』を出版し、それに長文の序文を付して、彼女の革命理論としての「自然発生性」を強調し、これを拠りどころとしてボルシェヴィズム＝レーニン主義にたいして批判を浴せたのにたいし、レーニンの反論が展開された。このような状況のなかで、ローザの思想および理論が正しく理解されることの必要を痛感したレーニンは、ローザの親友カルクスキーに彼女にか

んする資料の蒐集、全集の刊行および伝記の執筆を求めたのであったが、クララ・ツェトキンやフリーリヒを中心とする全9巻から成るこの全集の企画は、レーニンの死後おこったソヴェート共産党内部の対立、そしてそのヨーロッパ社会主義運動への波及というような事情のために、1923年、第6巻『資本蓄積論』、1925年、第3巻『修正主義への批判』および1928年には第4巻『労働組合闘争と大衆ストライキ』の3冊を出したのみにとどまり、とくに1925年以後、ローザをめぐる評価がさまざまに変転するなかで、フリーリヒも1928年、ドイツ共産党から除名された結果、全集の編集は挫折せざるをえなかったのである。フリーリヒは、ドイツ共産党反対派を結成するのであるが、そこでも多数派と対立してこれから離れ、1932年社会民主党左派とともに社会主義労働者党(SAP)を結成したのであって、1933年、ヒットラーの政権掌握にともなうドイツ共産党の非合法化とともに投獄され、やがてパリに逃れ、ここで本書を執筆したといわれる。第二次大戦後の彼は、西独の社会民主党に属してマルクス主義の伝統の再興をはかり、1953年フランクフルトで69才で歿したという。

以上のように、ローザにたいし一定の距離をおきながらも、レーニンの影響のもとに彼女の思想を正しく理解し、革命家としての彼女の生涯と思想を正当に評価し、革命家としての彼女の生涯と思想とをまことに熱情的に描き出しているといえる。その意味で訳者も強調しているように、「単なるアカデミックな研究書ではなく、こうした時代の刻印を負った書である」ことが特徴的である。筆者は、この書は原著は知っていたが、入手することができず、伊藤氏の流麗な訳文に接して、マルクス主義および労働運動を研究する者のひとりとして、感慨一入新たなものを感じないではない。この書にも明らかにされているように、ローザの思想にはつぎのような問題があると思う。まず第一に、いうまでもないことであるが、19世紀末から次第に覆いがたくなった社会民主党内部における修正主義的傾向、とくにエドアルト・ベルンシュタインの理論にたいする攻撃、その徹底的な批判と克服、第二に合法的マルクス主義＝社会民主党中央派の指導者として第二インターナショナルの理論的支柱としてのK・カウツキーにたいする批判、その議会主義的マルクス主義の限界の認識、それとの闘いがある。この二つは、マルクス主義の俗流的な歪曲や通俗化および思想的腐敗にたいする闘争という意味でのマルク

ス主義の純潔の保持について、社会民主党指導部にたいするきびしい糾弾であるが、これとならんでマルクスの遺産を継承しつつもマルクス主義そのものの教条化ではなく、独占資本主義＝帝国主義の変転する社会的経済的諸状況にたいして創造的に適用し、マルクス主義そのものを発展させ、豊富にしようとした理論的な側面が重要である。これらについてフリーリヒがのべるところについて考察することにしよう。

被圧迫民族としてのポーランド人として、またユダヤ人の子として生まれたローザが、社会主義運動に目ざめ、革命家として成長する過程において、ポーランド民族の解放に大きな関心を抱いたことは当然であった。「学校での反逆的な態度から革命的な社会主義への歩みは、ローザにあっては必要のものであった。彼女のうえには、リアリズムの圧制下にあるロシアの民族共同体の一員としての軛と、踏みじられたユダヤ人種の一員としての軛というロシア的状态もたらす三重の極端がのしかかっていた(26—27頁)。マルクスがとくにポーランド人民の民族独立とリアリズム打倒を訴え、これこそが社会主義革命の前提であることを強調したことはよく知られている。しかしこのようなマルクスの革命の理論構想は、1860年代から70年代にかけての自由競争段階における諸条件、すなわち東ヨーロッパにおける絶対主義権力の根強い支配とこれに抵抗する民族ブルジョアジーとプロレタリアートとの連合戦線との間にはげしい闘いが演じられている時期であり、ブルジョア民主主義革命の一翼を形成するところの民族解放闘争こそ、プロレタリア革命の前提段階として考えられたのである。しかしローザが、彼女に深い影響を与えたレオ・ヨギヘス(Leo Jogiches)とともに、社会主義運動の実践にふみ出した1880年代から90年代にかけては、帝国主義段階の到来にともない、社会主義＝労働運動の再編成が進み、1889年パリにおける第2インターナショナルの結成やイギリス労働運動における新組合の勃興をはじめ、全体としてヨーロッパ労働運動には革命的な機運が醸成され、階級闘争がかつてない規模で展開されたのであった。

ポーランドの社会主義運動は、民族解放闘争のいたましくも輝かしい歴史的伝統の上に立って、ロシアの革命運動＝「人民の意志」派に比べるならば、原理においても綱領においても一歩すすんでいた(38頁)。それはひとつには、「人民の意志」派の運動は、自己犠牲と献身に生きたといえ、革命のための明確なプログラムや人民大衆の力を評価しない限られた知識人の絶望

的なテロリズムであったのに反し、いくつかのストライキを指導する経験をもったのであったが、「人民の意志」派との同盟関係は、その組織に壊滅的な打撃を与えたのであった。ローザが、ポーランドの社会主義運動に接したのは、1880年代の末期に再組織された「プロレタリアート党」と労働者同盟との共同闘争の時期であった。この運動のなかでローザは、民族問題と社会主義革命についての理論を鍛え、マルクス主義の民族解放の理念を発展せしめ、ポーランドの歴史的現実創造的に適用することを学び、且つ強調したのであった。著者のこの部分の叙述はまことに印象的且つ説得的である。問題の本質は、1860年代の帝制ロシアと1890年代のそれとの絶対主義的基盤の変化からくるのであり、これにたいするローザの洞察こそ、彼女のポーランド革命論を支えるものであった。いまひとつ重要なことは、「マルクスのポーランド人民にたいする態度は、民族問題にたいする一般の理念から発したものではなかった。エンゲルス同様に、彼の諸国民の自決については、非常に懐疑的に考えていた。たとえば彼は、チェコの民族運動に反動的な汎スラヴ主義の傾向があるのを見ていた。したがって、マルクスの独立・民主的ポーランドにたいする支持は、戦略的見地から発したものであった(47—48頁)。従ってマルクスやエンゲルスは、これを絶対不動のものと考えていたのではなく、ひとつの仮説として考えていたのである。すなわち、客観的諸条件が大きく変われば、その仮説も当然再検討されなければならないというのである。

独占資本主義の成立とこれにともなうドイツおよびフランス資本主義の膨脹、ロシアにおける資本主義の発展は、ツァーリズムの支柱としての大地所有制の危機を深刻ならしめ、ロシア絶対主義は次第にその基礎が崩壊しつつあった。マルクスの戦略の目的物はすでになく、またその決定的な手段であったポーランドの民族革命もすでになくなっていた……。そしてポーランド社会の指導権は、ブルジョアジーの手に渡った(49—50頁)。かくしてローザの見解によれば、民族の独立は、ポーランド・プロレタリアートの当面の目標ではありえなかったし、社会主義革命だけが、労働者階級のうけいれうるポーランド民族問題の条件を提供するというのである(51頁)。これはきわめて重要な問題提起であり、彼女のマルクスのポーランド問題にたいする修正は、マルクス主義陣営の内部からの批判をよびおこしたのはもちろんであって、いずれの場合に

も、プロレタリア革命の利益のその他のあらゆる配慮への優先という観点から、ローザ・ルクセンブルクは、資本主義世界において民族自決権も一時的な公式とすることに反対したのである(56頁)。そしてこれはまた、「諸民族の牢獄」としてのロシアにおいて、民族自決権を強くおし出すことによって、マルクスやエンゲルスの理論を修正したレーニンによって、「ポーランド民族問題の解決にのみ妥当なその方法を、不当に一般化した点において誤っていた」と批判されたところのものであった。ともあれローザの理論は、その時代のポーランド民族問題解決のための正しい提案となりえたのであって、そのような勇氣あるそしてまた創造的な態度こそ、彼女をして真にすぐれたマルクス主義者たらしめたのである。その意味で、著者フレリヒのつぎの文句はまことに感銘を与える。そしてそれはひとりマルクス主義者のみならず、およそ学問に志すすべての者の態度でなければならない。

ローザ・ルクセンブルクは、ポーランドの民族問題やトルコの抑圧のもとにあった諸国民の民族問題を解決することを通じて、マルクスの国際政策の命題をくつがえした。そしてそのことによって彼女は、自分がマルクスの本当の学徒であることを示した。というのは、偉大な思想家のエピゴーネンと創造的な継承者を分つのは、前者が師の思想の既成の結果だけを金科玉条と墨守して、状況の変化に頑として逆らうのたいし、後者は偉大な先進者の精神を学んで、既成の結果そのものにもたいして自由で批判的な眼をもち、師がしたと同様に、その方法を異なった状況に適應させて変更させていくところにあるからである(58頁)。

以上、ややくわしくフレリヒの所説を紹介したが、この部分は本書のなかでもきわめて重要な一節をなしているからである。

とはいえ、ローザはマルクスの遺産を正しく継承させようとする努力において、いささかの妥協もしなかったことはいうまでもない。SPD 内部において次第に勢力を伸張しつつあったE・ベルンシュタインの修正主義思想が、1896年から1898年にかけて、『ノイエ・ツァイト』紙に発表され、いわゆる修正主義論争として党内を二分したのみならず、国際的にも大きな問題となり、バルブス、カウツキー、メーリング、ベール、ツェトキンをはじめ、ロシアではプレハノフ、イタリアではアントニオ・ラブリオーラ、フランスではジャンのジョレスとジュール・ゲードまでもひ

きこんだ大論争となったのであったが、修正主義に断固として攻撃を加えたことはいうまでもない。経験主義にたいして科学的認識を、「改良か革命」という二者択一にたいして「改良も革命も」と唱える彼女にとって、「プロレタリアートの日常闘争」は、最終目標と有機的に結合されなければならなかったのである。しかしこのような純粋でしかも柔軟な彼女の思想にとって最大の試練は、1905年のロシア革命とその後の1917年のロシア革命および翌18年のドイツ革命までの、要するにローザが虐殺されるまでの生涯の活動において必然的におこらざるをえなかったレーニンとの対立であった。最後にこの問題について、著者の見解をみることにしよう。

ローザとレーニンとの理論的対立は、ベルンシュタインやカウツキーとの論争および対立とは根本的に異なっていた。後者は、ロシア革命勃発以前の状況における理論的対立にとどまっておき、SPD 内部のいわば党内闘争であったのたいし、前者は、1905年のロシア革命という革命が具体的に日程にのぼっていた段階での戦術上の問題から発して、組織論＝運動論(自然発生性の問題)、革命理論(プロレタリア独裁の理論)そしてそれらを結ぶものとしての経済学の理論(資本蓄積論)などの、革命家としてのローザのレーニンとの対比を明らかにしたからであり、何よりもまず、マルクス主義の遺産を正しく継承し、真に創造的に発展させることの意義は何であったかを、革命の具体的な展開のなかで検証することであったのである。彼女自身、ドイツ共産党の前身としてのスパルタクス団の理論的指導者であっただけに、ボルシェヴィズムとの対立はある意味で、今日の「社会主義への独自の途」を想わせるものがある。彼女は、労働者大衆の自然発生性を重視し、ロシアにおける大衆ストライキをもって、改良主義的なSPDの議会主義的な指導者を批判するものとしてとらえるとともに、プロレタリア大衆の運動様式であり、革命のなかでのプロレタリアートの闘争の現象形態なのであり、大衆ストライキが革命をつくり出すのではなく、革命が大衆ストライキを生み出すのだと考えた(193頁)。しかし自然発生性の理論に裏づけられるこの大衆ストライキ(Massenstreik)は、そのものとしては結局のところ、経済闘争に終るのであり、(レーニン「何をなすべきか」)、それを真に政治的なものとしてプロレタリア革命にまで持続させるものこそ、プロレタリアートに目的意識性を吹きこむものとしての指導部の責任であり、前衛政党としての共産

党の組織は、そのために職業的な少数の選抜された革命家集団の権力集中的な指導の強調の重要性があった。自然発生性を強調するローザとレーニンとの戦術上の争点が、もっとも白熱したものとなったのは、実にこの問題をめぐってであった。自然発生性を不当に強調するローザは誤っていたとしても、彼女のボルシェヴィキ批判、とくにその農業(民)政策批判は、のちに歴史的経験のなかで実証されたところであり、要するにレーニンとローザとの矛盾は、ロシア革命とドイツ革命との関係および相違についての認識のなかではじめて理解することができる。またレーニンのプロレタリア独裁の理論とローザにみられるところの社会主義は労働者大衆の行動によってのみ実現されるという理論の差異は、社会主義における西欧デモクラシーの評価という今日の問題とも密接につながっている。

ローザの思想を今日、われわれが正しく理解し評価することはますます緊急なものとなろうとしている。⁽¹⁾その意味で本書はまことに絶好の手引きとして役立つ。彼女の思想や理論のたんなる紹介でなく、その思想の真髓を、彼女に代って語りかけているような感銘を与える。彼女の生いたちや美しく豊かな人間性についてのべていることは、この研究をさらに充実したものとしている。しかし同時にあまりにもローザ崇拜が紙面に漲っており、つぎの点に大きな欠陥が感じられたことである。①「自然発生性と目的意識性」の問題について、レーニンが「何をなすべきか」のなかで展開し

た問題と、ローザの「自然発生性論」との差異についての理論的な追求がまったく無視されていること。②資本蓄積論にみられるローザの弱点、とくにカウツキーの「帝国主義論」からの影響についての指摘が全く欠如しておりHobson, LeninそしてHilferdingの理論との関連において、今少しほりさげられるべきであると思う。③ローザの活躍した時期(とくに1905~1914)は、イギリスでは産業上の「大不安」(Great Unrest)の時期にあたり、アナルコ・サンディカリズムが、労働組合運動にかなりの影響を及ぼしつつあった頃であることはよく知られている。また第一次世界大戦を予知せしめる暗雲がたれこめたこの時期において、第二インターナショナル内部にはブランキズムの思想が影響力をもっていたといわれている。ローザの思想、とくにそのMassenstreikの戦術は、それらの理論とは全く無関係であったのかどうか、これについてもふれるべきであった。とくにレーニンとの関連において、この問題は今日きわめて重要な意義をもつ。④ローザ⁽²⁾の哲学的な側面についての評価が全く脱落している。

しかしそのような弱点にもかかわらず、本書は、ローザ⁽³⁾についての古典的研究としての地位をしめるという訳者の評価を、読者は、本書を通じて再確認するにちがいない。(思想社、1968年3月刊、A5、424頁、1,600円)

飯 田 鼎

注(1) その意味では、フレット・エルスナー「ローザ・ルクセンブルク——その生涯と業績——」(杉山忠平訳、理論社、1955)も無視しえないが、ローザ批判の立場はかなりちがっている。それはあくまでもドイツの統一社会党の立場からのローザ解釈を代表するものとして注目に値する。

(2) この問題については、Georg Lukács, Geschichte und Klassenbewusstsein, Berlin, 1923, (平井俊彦訳「ローザとマルクス主義」1965年、ミネルヴァ書房)が興味深い。

(3) 最近、ローザ・研究の本格的なものとして、Nettl, Rosa Luxemburg, 2 Vols, London, 1966. が出た。ポーランド語の文献・資料も駆使しており、大著であるが、筆者はいまようやく読みはじめたばかりである。フレリヒの研究とこの著作に基本的に依拠したものとして、竹本信弘「ローザ・ルクセンブルクの社会主義運動論」(「思想」1968年9月号)は、参考になる。